

卓球

高新スポーツ賞の顔 ⑥

全国屈指の強豪である明德義塾中高卓球部で中学1年から6年間、ほぼ不動のレギュラーだった青井さくら、白山亜美、上沢依央、上沢茉央。春夏の全国大会はこの4人を軸に、新型コロナウイルス禍で中止された2020年の全国高校総体を除いた9大会で優勝1度、準優勝と3位が3度ずつ、ベスト8が1度あり、上位に進めなかったのは1度だけだった。

明德卓球部史上最強とも呼ばれたこの4人は、いったいどんな人物なのか。元全日本女王で就任20年目の佐藤利香監督に聞くと「普通の高校生ですよ」と涼しい顔で言い切った。

ちよつと待った！ あんなすごい結果を残してきた選手たちですよ？

◇ 「うわあ、この人たち強いなあつて思いました」  
こちらが待っていた答えを返してくれたのは、双子の上沢姉妹の妹、茉央。昨秋の栃木国体でのこと。国体の団体戦は中学、高校の大会と違いダブルスがない。3人いれば試合ができるため、茉央は控えに回り、姉の依央らプレーする3人をベンチから見守ることになった。

「みんな、めちゃくちゃ強かった。チームの中で任された役割を完璧にこなすんです。自分が試合に出ている時は気付かなかったけど、こんなすごい人た

「普通の子」たちの快挙

よくしゃべり、よく笑う「普通の高校生」。でも実は「めちゃくちゃ強い」(明德義塾中高1山下正晃撮影)



ちと一緒をやってたのかと」

同じ中高一貫校で、日本のシニア卓球界の権綱のような存在である四天王寺(大阪)に、明德はこの6年間で6戦して6敗。しかし、栃木国体準決勝では四天王寺メンバーの入った大阪に2-3と食い下がった。茉央はスコア以上に、3人の卓球台に向き合う姿勢に感銘を受け

たのだった。

技術的な話でいえば、青井は高い身体能力を生かし、強いスピンの掛かったドライブをどんなに打っていくスタイル。白山は自分から攻めるより、ラリーを続ける間に優れた観察力で相手の弱点を探し、ミスを誘う。上沢姉妹とともにフットワークが軽く、相手の意表を突くス

マッシュが得意というのが共通点。ただし、姉・依央は右手、妹・茉央は左手でラケットを握るといふ点が大きく異なる。

つまり、全くタイプの違う4人が絶妙なバランスでかめ合ったチームだった。また、4人それぞれに自身のプレススタイルを語ってもらおうと、チームメイトからの評価と見事に一致する。自分や仲間のできることで、できないことをしっかり把握している人間や組織は強い。

佐藤監督の言う「普通の子」の意味が、ますます分からなくなつた。

◇ 主将、青井はラケットの片面に青いラバーを貼っている。21年に従来の赤以外の色が解禁されると、すぐに使い始めた。

「名前が『青井』だから青にしたのかって、よく言われるけど、違います」と、本人はあくまで打ちやすさを第一に選んだと大笑いで否定するが、チームメイトは「初めて青のラバーで試合に出た時、ユニホームも青を着てたし。キャハハッ」。

さらに「昨日、校舎の入り口で転びそうになった人がいた」という話や、体言の授業でサッカーをして、負けて本気で悔しがった話やらで、笑いが止まらなくなつてしまった。

「響が転んでもおかしい年頃」か……。確かに、普通の子なのかもしれない。(井上太郎)